

(様式 1)

令和5・6・7年度「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」
学校改善プラン(3年次)【小学校】

【学校名等】

学校名	綾部市立綾部小学校							校長名	小嶋 康弘
学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援	児童数	536 名
学級数	3	3	3	3	3	3	3		
事業担当教員名	藤原 千恵								
① 中学校区で目指す子ども像	ブロック教育目標 自立と貢献 ～夢をもち 仲間とともに 未来を切り拓く 子どもの育成～ ブロック 目指す子ども像 ※下線部太字…重点 夢をもち 仲間とともに 未来を切り拓く 綾中ブロックの子 ・ 夢をもち (将来を見据え、主体的に学び表現する子) 【展望する力】 ・ 仲間とともに (豊かな心をもち、自他ともに大切にできる子) 【つながる力】 ・ <u>未来を切り拓く (心身ともに健康で、実践力と行動力のある子) 【挑戦する力】</u> ・ 綾中ブロックの子 (誇りと郷土愛をもち、地域とかかわる子) 【貢献する力】 ・ 主体的に学び、課題解決に向けて最適な方法を選び、粘り強く取り組むことができる。 ・ 他者との効果的なコミュニケーションを取り、対話を通じて自分の考えを伝え合う表現力(話す・聴く・考える)を身に付けている。 ・ 自己理解を深め、夢や希望をもち、それらの実現に向けて行動することができる。								
② 目指す子ども像	めざす学校像 『たい』と『あい』のあふれる『魅力ある学校づくり』 ・ 自分自身をよりよくするための自己調整の方略を知り、課題の解決に向けて主体的に、粘り強く取り組むことができる。 ・ 学ぶことの楽しさや大切さ、頑張ってやり切ったという達成感を児童自身が実感することができる。 ・ 周りの人のことを考え、「自分は何が出来るのか」を考え、実行することができる。 ・ 課題解決の場面で、理由や根拠を明らかにして自分の思いを書いたり話したりすることができる。 ・ 確かな学力を身に付けることができる。 ・ 自己理解をし、見通しをもった学習ができる。								
③ 目指す子ども像に対する現状と課題	・ 与えられた課題に意欲的に取り組むことはできるが、主体的に課題に取り組む力が十分に育っていない。 ・ 学習面において、粘り強く活動に取り組むことに差がある。 ・ 相手の気持ちを考えて行動することが大切だと感じている児童は多いが、行動に移すことが難しい。 ・ (ペア・グループ活動も含め) 自分の思いを伝え合うことができる児童は多いが、理由や根拠を明らかにして書いたり話したりすることについては課題が見られる。 ・ 国語科や算数科等の教科学習において、基礎・基本の力が身に付いていない児童がいる。 ・ 学習活動や思考の過程などを振り返る機会はあるが、そのことが自己理解や学びを深めることにはつながっていない。								

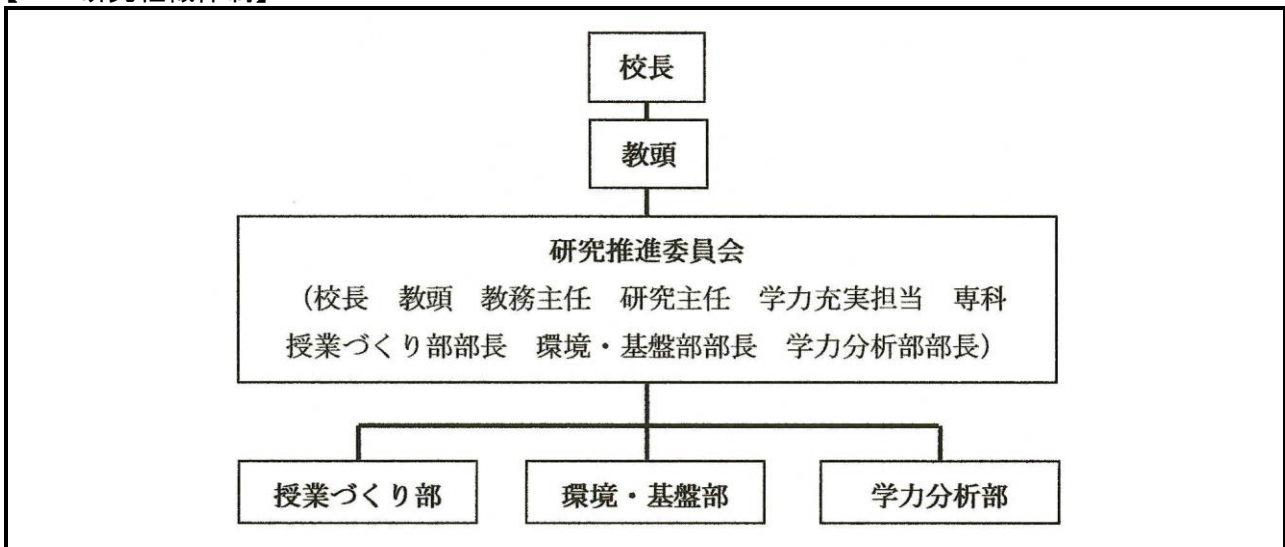
④ 目指す子ども像に達するための仮説	・ 「課題との出会い」と「振り返り」を大切にした授業づくりを行うことで、児童が主体的に学び、自己調整する力が高まるのではないかな。また、そのことが学ぶことの楽しさや大切さ、達成感を児童自身が実感することにつながるのではないかな。 ・ （授業や学級活動等の中で）相手意識を持った話し合いや対話を繰り返す中で、聞く力を育てることが、人を大切にしようとする気持ちを高め、自分にできることを考え、実行する力を育てることにつながるのではないかな。 ・ 問題解決への意欲を高め、児童が既習の知識及び技能等を関連付けながら根拠を基に筋道を立てて考え、伝え合うことで、論理的に考える力や表現する力が高まるのではないかな。 ・ 児童の学力の状況を把握し、個に応じた指導の工夫を行うことで、基礎・基本の力が身に付いていくのではないかな。 ・ 学習や行事等の中で行う活動を自分事として捉えさせ、教師が具体的に評価をしていくことで、粘り強く課題に取り組む力を高めたり、自己理解を深めたりすることにつながるのではないかな。
--------------------	--

令和7年5月1日現在

【1 研究主題】

みんなで Enjoy ! 算数 $+ \alpha$ # 論理的に考え、伝える力の育成 # 自己調整力

【2 研究組織体制】



【3 具体的な取組内容】

【年間を通して】 ・ 主体的に学ぶ力を高めるために、算数科を中心として、「課題との出会い」と「振り返り」を大切にした授業づくり（授業改善）を行う。 ・ メタ認知を高めるために、授業や行事等の中で「振り返り」をさせたり書かせたりする。また、その振り返りを次の学びへ生かせるようにする。 ・ 授業や学級活動を中心に、相手意識を持った話し方・聞き方について指導をする。 ・ 知識・技能を定着させ、思考過程を表現させるために書く活動を充実させる。 ・ 主体的に学ぶ力や基礎・基本の力を身に付けるために、算数コーナー等、誰もがチャレンジできる場を設定する。 ・ 児童の学びの変容を捉えたり教師の授業改善を行っている過程を捉えたりするために継続的に各種調査の結果を分析し、教職員で共有する。 ・ 児童が主体的に学ぶ授業づくりについて考え合うために授業研究会を実施する。（学期に1回） ・ 確かな学びの授業公開で客観的な外部からの意見を聞く。（9月） ・ 人と関わる力を向上させるために、ソーシャルスキルトレーニングを行う。（行事や取組の前） ・ 外部講師による理論研修を実施する。（7月・9月）

【4 仮説及び成果を検証するための質問項目】

学年	質問番号	質問項目	概念	備考
4～6	30	自分の考えた道すじをほかの人の視点からも考えて、見つめ直すほうだ。	自己調整	
4～6	31	わからない問題にであったとき、調べたり、さらに深く考えたりしている。		
4～6	32	課題が終わったら、自分が学んだことを簡単にまとめている。		
4～6	33	目標を達成するためのよりよい方法をいつも考え、取り組み方を変えていっている。		

* 5、6の分析項目は削除しています。

【7 分析結果を踏まえた指導改善、個に応じた具体的な手立て】

個に応じた具体的な指導・支援方法 - 様々なデータ（学びのパスポート・算数アンケート・評価テストの到達点）を活用し、個の児童の学力と自己調整に着目した実態把握を行う。 - 担任外を中心に学習をサポートできる場を設定し、どの児童も課題を最後までやり切ることができるようにする。
集団としての具体的な指導・支援方法 - 児童の感情が動く授業づくりを実践するため、算数科を中心に授業改善を行い、授業研究会で検証を行う。 - 自己の変容が実感できる振り返りができるよう、自分の学びを振り返ることができる振り返りのさせ方や次の学びへとつなげる具体的な支援について研究を進め、実践に生かす。 - キャリア教育を充実させることで、綾中ブロックが目指す「自己理解を深め、夢や希望を持ち、それらの実現に向けて行動することができる」児童生徒の育成につなげる。

【8 仮説の修正】

どの層もめあてを達成できる授業づくりを実現するために、友達のところに行って教え合い、学び合いができる子どもたちを育てる必要があるのではないか。

【9 具体的な取組内容の修正】

授業の中で児童が学び合う機会を意図的に設定する。学び合いの場面では、話しやすいペア・グループではなく、助け合えるグループが作れるようにする。
--

【10 児童の変容（普段の様子から）】

個に応じた具体的な指導・支援方法

【様々なデータ(学びのパスポート・算数アンケート・評価テストの到達点)を活用し、個の児童の学力と自己調整に着目した実態把握を行う】

- ・ 学びのパスポートや1、2学期に実施した算数アンケートの結果、評価テストの到達点に対する通過率の設定を通して、個の児童の学力と自己調整に着目した実態把握ができた。
- ・ 本年度は、校内研で新たにヒストグラムから注目する集団を設定し、その集団の特徴から授業改善の視点を考える、という分析方法も取り入れた。分析シートからステップに属する児童の「強み」や「課題」を見つけることで、授業改善につながるような仮説を立て、実践に生かすことができた。
- ・ 学びのパスポートの結果(相関図・個人カルテ等)と普段の様子から児童の実態を把握した上で、導入の工夫や必要な手立てについて具体的に考えた。導入を工夫することで、学力が低い児童も課題を自分事と捉え、主体的に学ぶ姿が見られた。学力向上につながったとは言えないが、児童の感情が動く授業づくりを実践するための授業改善は必要不可欠であり、そのために、今後も自己調整ができる授業づくりの検証として、データを効果的に活用していく必要がある。

【担任外を中心に学習をサポートできる場を設定し、どの児童も課題を最後までやり切ることができるようにする。】

- ・ 児童自身が自ら学ぶ場に来ることを選択し、担任外の教員の支援を受けながら課題をやり切る姿が見られた。その際、学習をやり切ろうとする過程を認めたり、自力で課題解決できたことを具体的に褒めたりすることで、「できた」「分かった」と実感できる児童が増えた。

集団としての具体的な指導・支援方法

【児童の感情が動く授業づくりを実践するため、算数科を中心とした授業改善を行い、授業研究会で検証を行う】

- ・ 児童の感情が動く授業づくりを実践するため、指導案の中に「心を動かす仕掛け」「引き出したい姿」「感情イメージ」を記入する欄を作成した。自己調整が働く仕掛けを明記し、そこから引き出したい児童の様子をより具体的にイメージすることで、意図的・計画的にメタ認知を働かせてよりよい自己調整ができる授業づくりを目指すことができた。
- ・ 授業研究会では、学力と自己調整に着目して分けた①～④の層に該当する児童を抽出し、授業の中で、それぞれの児童がどのように問題解決をしているか観察をした。観察の際は、児童観察シートを活用し、教師の「心を動かす仕掛け」に観察児童がどのような反応をしていたか、どんな姿で学習に向かっていたのかを記入したり、観察児童の反応に合わせて感情イメージを記入したりした。事後研では、それぞれが記入した観察シートを持ち寄り、「どの層も児童の感情が動く授業になっていたか」を切り口に、それぞれの児童の様子について交流を行った。
教師が観察児童の感情を記入し、事後研究会で、お互いの感情イメージを共有することで、どの場面でどのような手立てが必要だったのかという具体的な授業検討をすることができた。どの層の児童を観察しているかによって、手立ての共通点や違いが生まれ、授業者は、それぞれのグループが考えた授業提案をもとに、どのような授業改善ができるかを具体的に考えることができた。

- ・ 授業研究会後には、学んだことについては、「My Action!」(明日以降の授業に生かしたいこと・公開授業・事後研究会で学んだことを記入するもの)に、互いの実践から学んだことを自分たちの授業にどのように生かしていきたいかを具体的に記入した。教師自身が授業公開から学んだことについて丁寧に振り返り、授業改善を目指すことで、生き生きとした表情で粘り強く課題に取り組む児童の姿が見られる場面が増えた。

【自己の変容が実感できる振り返りができるよう、自分の学びを振り返ることができる振り返りのさせ方や次の学びへとつなげる具体的な支援について研究を進め、実践に生かす】

- ・ 各学年で「振り返りシート」を作成し、部会の中で、振り返りの目的や手法について協議をする中で理解を深めることができた。(学習計画、振り返りの視点、授業の達成度、先生からの挑戦状など)
- ・ 児童が見通しを持って学習に取り組んだり、意欲的に学習に取り組んだりするツールとして振り返りシートを活用することができた。
- ・ 3学期には、「学びのコンパス」の実践を行った。児童が「課題に出合ったとき」「課題が解決できないとき」「課題が解決できた後」「振り返りの場面」で、どのようなメタ認知を働かせ

たかを自分自身で振り返ることで、自分の学び方について考えたり、友達の学び方から自分にとってよりよい学び方を考えたりすることができた。

- ・ 4～6年生では、児童が授業のどのような場面でどんな自己調整力を働かせているのかを検証するため、振り返りシートの中に、「自己調整に関わる振り返り」の欄を作成し、子どもたちと共有しながら授業を進めた。また、振り返りの視点を意識した教師の声かけを行った。算数アンケートでは、「学んだことや気づいたことを振り返りに書いている」という項目において、どの学年も7割以上が肯定的な回答をしている。4～6年生対象に実施をした記述アンケートからも、振り返りを書くよさや大切さは実感している児童が多いと考えられる。肯定的な回答をしていない児童については、振り返りの内容が十分ではないと感じている児童が多いのではないかと考えられる。より質の高い振り返りをさせるための実践を具体的に考えていく必要がある。

【キャリア教育を充実させることで、綾中ブロックが目指す「自己理解を深め、夢や希望を持ち、それらの実現に向けて行動することができる」児童生徒の育成につなげる】

- ・ A11 HEROs 合同会社代表の中山芳一先生に、本校児童4～6年生を対象に「心の力を鍛える」をテーマに授業をしていただいた。心の力を鍛えるために大切なこととして、「丁寧な振り返り」についてお話をされ、子どもたちに振り返ることの大切さや何を振り返ればいいのかを具体的に教えていただいた。本校では、授業や学校行事の中での振り返りを大切にしているが、「あったこと」や「その時の気持ち」を振り返る段階で終わっている児童が多く、「どうして」「これからどうする」といった振り返りが十分にできていない傾向がある。今後は、より質の高い振り返りをするために、自分に質の高い「問い」を立てることができるよう、具体的な手立てを考えていく必要がある。

【授業の中で、児童が学び合う機会を意図的に設定する】

- ・ 高学年では、少人数授業を実施した。少人数にすることで、安心して自分の考えが発表できたり、友達と一緒に学び合ったりする姿が見られた。学び合う機会を意図的に設定することは今後も必要であるが、習熟度別学習では、低位層の児童たちが、教え合ったり、新たな課題を見いだしたりして、自分の学びを深めることは難しい。助け合えるグループが作れるようにするために、どのようなグループに分けて学習をしていけばよいか、検討が必要である。また、学び合いができる学級集団を作るため、学級経営や人間関係づくりについても学んでいく必要がある。

【11 次年度の研究構想】

- ・ 来年度も、認知能力と非認知能力を一体的に育む授業づくりについて研究を進めていく。児童の感情が動くしかけを考え、そこから引き出したい児童の姿を具体的にイメージすることで、より意図的・計画的にメタ認知を働かせてよりよい自己調整ができる授業づくりを目指す。
- ・ データを分析する機会を定期的に設定し、分析したことをもとに授業改善を行う。データの分析の際は、教師一人一人が必要なデータを自分で選択し、分析をすることで、学級の実態に合った授業改善を目指す。
- ・ 個に焦点をあてて分析を行い、取組を通して、個の変容が見られたかを検証する。
- ・ 振り返りでは、自らの学びや成長を振り返ることに加え、うまくいかなかった理由を考え、次の学習でどのように取り組みたいかを考える等、振り返りをレベルアップさせていく。児童により価値のある学習転移を生み出す振り返りをさせるために、児童にどのような「問い」を立てさせる必要があるか、具体的に考えていく。
- ・ 学級経営や生徒指導、集団作りについても学ぶ機会を設定する。学級経営や人間関係づくりの研修を行ったり、学級経営案を振り返る演習を行ったりすることで、学校・学級という場をより豊かな環境にすることを目指す。
- ・ 今後も学びのパスポートの分析を生かし、小中のつながりを大切に児童生徒の成長を見取ることができるようにする。
- ・ ブロックの課題である学力向上・授業改善を図るため、見方・考え方を働かせながら、既習事項と新しい学びをつなげ、学習を深めることができる授業づくり（授業改善）について研究を進める。